

何が日英独市民の行動変容をもたらしたか

研究代表者:谷口 綾子 (筑波大学システム情報系)

1)研究期間

中期型(2020年5月25日~2021年3月31日)

2) 応募時の目的・目標・達成イメージなど

新型コロナウイルスによる外出自粛や備蓄増などの行動変容は、政府や自治体による政策のみならず、その社会の文化的背景にも左右されることが予想される。本研究では、世界的パンデミックにおける日本・英国・ドイツ各国の(1)国や地方自治体の政策・施策要因と、(2)交通環境など地域の環境要因と個人属性、(3)文化・社会的背景に左右されるであろう心理要因が、市民の行動変容に与える影響を定性的・定量的分析により明らかにすることを目的とした。これらより、今後の我が国の政策決定の一助としたい。

3) 本プログラムで実施した研究の内容と成果

COVID-19 の蔓延により世界各国で多数の感染者が確認されている(図 1 参照)。これにより、半ば強制的な行動変容がもたらされた。我が国においても、2021 年 4 月時点で 2 回の「緊急事態宣言」が発令され、外出自粛の協力要請が行われた。また、イギリスやドイツでは、都市閉鎖や罰則を課した外出行動制限が行われた。

本研究の目的は、 COVID-19 蔓延初期の日本、イギリス、ドイツの一般市民の行動変容とその要因を定量的分析により明らかにすることである.

なお,本研究は継続中であり,今後,各国の主な COVID-19 対応策と新聞報道分析を通じた政策の評価,市民の反応を定性的に把握する予定である。

【方法】

COVID-19 蔓延初期における人々の外出自 粛や備蓄行動/買い物行動,交通行動の変容 の規定因を定量的に把握するために,日本, イギリス,ドイツにおける首都圏と自動車依 存地域を対象として、Web アンケート調査 を実施した.調査は,2020年5月7日から 2020年5月15日,対象地域は日英独の首 都圏と自動車に依存した地域の2地域,計6

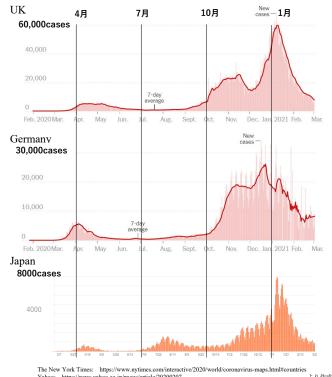


図1 日英独の新規感染者数推移(2020.3 月~2021.3 月)

国立大学法人筑波大学 2021.5.1

地域, 性別・年代(20-60代)を均等割り付けした各地域250名, 計1500名である.

【結果】

図2は,各国の市民の不安度を比較した結果である。不安は,ある状況下で大きく変動するような「状態不安」,ある個人において比較的一定していると言われる性格特性「特性不安」,対人面での不安である「社会的不安」の三種類についてそれぞれ測定した。日本人は英独よりも不安度が高く,性格的に不安になりがちで,コロナ禍で不安な状態にあり,他人の目が気になっていることが示された。

図 3 は Slovic(1986)のリスク認知マップを援用し、人々が COVID-19 に抱いているリスクイメージを様々なハザードと比較した結果である. 横軸は恐ろしさ、縦軸は未知性である. 日本人は全てのハザードで恐ろしいと思う傾向があり、COVID-19 は癌やエイズ、高齢者の運転と同レベルのリスクイメージとなっていた.

図4は各国の衛生行動の実態である. 日本人は元々マスク着用習慣のある 人が多いこと,うがいの実施率も高い ことが示された.ドイツでは本調査の 直前の2020年4月下旬に,公共交通 等でのマスク着用が義務づけられた ため,「以前は行っていないがCOVID-19対応で頻度を増やした」人が多い. 英国はこの後,2020年6月に公共交 通等でのマスク着用が義務づけられた

図5は,外出活動のうち,個人の自由 度の高い余暇・レジャー目的での外出 頻度を週当たり回数に換算し,

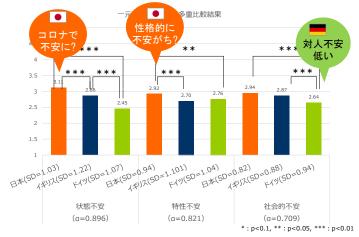
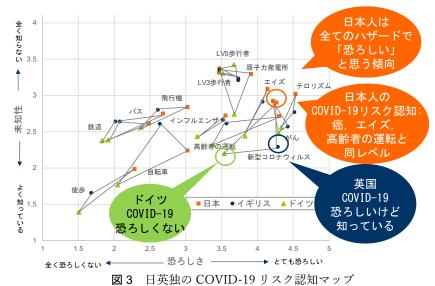


図2 日英独の不安尺度比較(状態不安・特性不安・社会的不安)



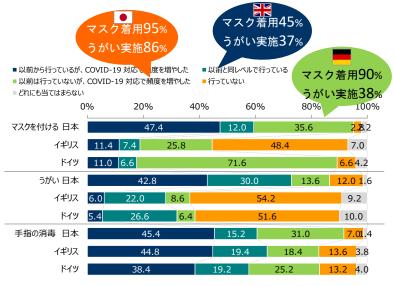


図4 日英独の衛生行動の実施実態

国立大学法人筑波大学 2021.5.1

COVID-19 感染拡大前後で比較したものである。日本人は元々英独の $1/5\sim1/4$ の回数であった他者との余暇・レジャー活動を、さらに3/4減らしていた。英独は半減に留まっており、他者との余暇・レジャーを我慢する日本人の生真面目さが伺える。

アンケート調査で問うた様々な心理要因や感染防止行動が 主観的幸福感(幸福度)に与える影響とその関係性を探るため、3 カ国のデータで共分散構造分析を行った結果を図 6 に示す. これより、女性や高齢者は COVID-19 に対するリスク認知が高いこと、リスク認知が高いほど「自分や他者は自粛している」と思っていること、同居人がいる人ほど感染防止行動を行う傾向があること、他者から自粛を期待されているほど感染防止行動を行っていること、私事関連の外出を自粛しているほど衛生行動や備蓄などの感染防止

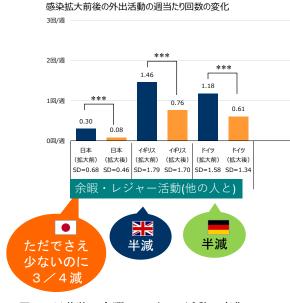


図5 日英独の余暇・レジャー活動の変化

行動をしていないこと、仕事での自粛と私事の自粛行動には相関があること、活動が減少すると幸福度が下がること等が示された。

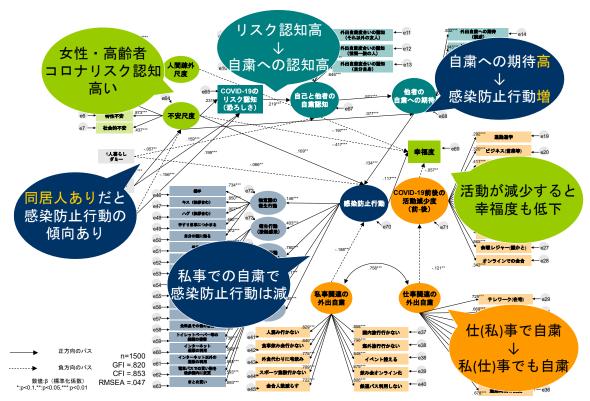
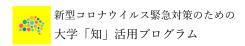


図 6 日英独の COVID-19 対応行動実態とその要因の構造モデル

国立大学法人筑波大学 2021.5.1



- 4) 研究業績・研究広報 (*:本助成のクレジットを表記)
- 石橋拓海,谷口綾子,Giancarlos Parady,髙見淳史:COVID-19 蔓延初期の行動変容と要因の 日英独三カ国比較,第63回土木計画学研究・講演集(CD-ROM),2021.*
- 石橋拓海,谷口綾子:政府による COVID-19 対策への新聞報道と首都圏市民の満足度,実践政策学(Policy and Practice Studies),第7巻,第1号,pp.49-61,2021.*
- Parady, T. G., Taniguchi, A., Takami, K. (2020) Travel behavior changes during to the COVID-19 pandemic in Japan: Analyzing the effects of risk perception and social influence on going-out self-restriction, Transportation Research Interdisciplinary Perspectives, Volume 7, September 2020, 100181. DOI: https://doi.org/10.1016/j.trip.2020.100181

5) 最新の成果・情報

筑波大学「知」活用プログラムウェブサイト>谷口 綾子

https://www.osi.tsukuba.ac.jp/fight_covid19/taniguchi/

インタビュー記事

https://www.osi.tsukuba.ac.jp/fight_covid19_interview/taniguchi/